

霊操第 2 週も後半。イエス様がいやしのわざを続けた“ガリラヤの春”のあと、受難を予告し弟子たちが離れる“ガリラヤの危機”を迎えます。霊操を通して神様からの呼びかけを感じましょう。

1. 「メシアとしての覚悟」英 隆一朗神父から マルコ 8：27～37

参考資料

『イエスの生涯を黙想する』英 隆一朗神父 キリスト教放送局 日本 FEBC 第 16 話 「メシアとしての覚悟」
2007 年 10 月～2008 年 3 月放送 （一部表現を変えています）

- ・イエスが自分の使命を果たしていく上で、転機となった話。
- ・「イエス・キリストは誰であるか？」という大事な問いが出てくる。
- ・ペトロは「あなたはメシア（救い主）だ」と言う。
- ・不思議なのは「メシアだ」と言って、「誰にも話さないように」とも言ってる。
- ・「メシア」という自己理解と、「十字架にかかって死ぬ」とセットで言う。
- ・「メシア」とは何なのか？ 「イエス様の使命」は何なのか？ 両方問われている。
- ・他の国に攻められて奴隷状態に置かれているユダヤ人はメシアの到来を待望していた。
- ・自分たちには政治的にも経済的にも独立がない。圧迫されていたので自分たちの民族を解放してくれる救い主を待ち望んでいた。だから、「イエスがメシアかどうか」は大問題だった。
- ・「もしイエスがメシアだったら自分たちを救ってくれる」強い期待があった。
- ・だから、ペトロが「メシア」と言ったことはとても重要。

- ・でもイエスは「十字架にかかる、誰にも喋るな」と言う。
- ・メシアだとしたら、十字架にかかって死んでしまったら、ペトロもユダヤ人も困る。
- ・独立国家を作った王様がメシアのはず。それなのに、すぐに十字架にかかって死んでしまう、とイエスは言う。
- ・イエス自身は、自分がメシアだとは宣教活動の最初からおそらくわかっていた。
- ・自分がメシアであることと、十字架にかかることがイエスの中で繋がった時期については、よくわからない。

・イエスの宣教の初めの頃を「ガリラヤの春」という。素晴らしい話と癒しのわざで多くの人が付き従った。

・でも、イエス様の中に「(素晴らしい話と癒しのわざを続けても) 本当の意味で神の国はこない」
危機感があったのではないか？

・学者たちは「ガリラヤの危機」という。その危機をイエスはどう感じて、メシアとして自分が十字架にかかって死ぬことをどこで意識して決意したのか？ 内面は想像しにくい。

ヨハネ福音書では少しだけその辺に触れている。

パンの増加の後、

「イエスは人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとするのを知り、ひとりでまた山に退

かれた。」(6:15)

満腹した物理的な満足感から、人々に「世俗的な王にしよう」と言う欲望が湧いてきている。

人々とイエスに大きな食い違いがあり、ひとりで山に退く。

このために弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスとともに歩まなくなった。

そこでイエスは弟子たちに「あなた方も離れていきたいか？」と言われた。

「ガリラヤの危機」とは、多くの人がイエスについていけなくなって離れたこと。

その中でメシアとしての本当の自覚「自分が何のために、生まれて、何をするのか？」イエスは真剣に考えた。

「メシアであることは、十字架にかかって自分の命を捧げること」と意識したのが、マルコ8章のこのくらいの時期。

32節でイエスは受難予告をはっきりとお話になる。

ペトロはイエスが「メシア」と言って「十字架にかかる」と聞いたので驚いて脇へお連れして「言ってることが間違っています」と諫める。

33節 「サタン、引き下がれ。人間のこと」とペトロはイエスに怒られる。

ペトロの方が人間的には当たり前。人々を救う、経済的・政治的・軍事的にも人を救わないといけないメシアが、死んでしまったら困る。考え方が全く違うから諫めます。

私たちが深めないといけない点。

Q.私にとってイエスは誰なのか？

Q.そしてイエスは何をしようとされたのか？

Q.そのイエスに従っていくとはどのようなことなのか？

救いの内容とは何なのか？

イエスは十字架にかかって死んでしまっただけでこの世的には、ある意味で失敗。

でも、メシアであることと結び合わせて話している。

メシアであることと、十字架にかかって死ぬことがセットで語っている。そのことがキリスト者が

信じるメシアの姿。

私たちが「信仰する」「イエスに従っていく」といくことは、この世的なことと分けて考える必要がある。

キリスト教は、現世ご利益的な宗教ではない。イエスは十字架にかかるメシアだった。

そのイエスを信じられるかどうか？

自分の十字架を背負えと言う。考えたら厳しい宗教。これでは多くの人が離れる。現世的な成功はない。

本当にイエス様に従う人は少ないかもしれない。でもその向こうに本当の喜びがある。

人生を賭ける本当の喜びがある。生きがいと呼べるものをイエスと共有できる。

説教したり、人を癒したりではなく、命を賭けて救いの地平を切り開かなければならなかった。

それに私たちが与ろうとするなら、私たちも自分の命を捨てて、自分の小さな自我を捨てて、その世界に向かうとき、イエスの恵みが私たちにはっきりと示される。そこまでイエスは、私たちの道と救いを用意してくださっている。

イエスにとって大きな決断だった。十字架にかかって死ぬこととセットでなければ、本当のメシア、全人類の罪からの救い、はあり得ない。

私たちがイエスをメシアと崇め、従っていくためには、私たちも何らかの意味で自分を捨てる、十字架を担っていく覚悟、決意が必要。

厳しいようにも見えますが、自分を捨てた方が実際は楽。結局、私たちは小さな計画に、枠にはめられて、こだわって、小さな幸せにこだわっているから苦しい。それを捨ててしまっって、自分を全部捨ててしまった時に、自分の心の中にあるのは、神の恵みだけ。自分に囚われた状態から神の恵みに包まれる。囚われを手放すと大きな恵みが私たちの心、人生に溢れてくる。このようなイエス様に従っていけるか？ 幸せを得られるか？

イエスの決断と、私たちの決断、その先に私たちの救いが開かれてくる。そこまで私たちが行けるか？ この箇所を味わいましょう。

2. イグナチオがサビエルに呼びかけた言葉とされる箇所

私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、私のため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」

マルコ 8 : 34～35

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか」 8 : 36 節

『フランシスコ ザビエル』 DVD 発売元 ライフ・エンターテイメント 2009 年 本編 58 分 （一部表現を変えています）

キリストの弟子以降、最も偉大なる宣教者、フランシスコ ザビエル。生誕の地は、北スペインのナバラ王国。16 世紀のヨーロッパは、探検家や芸術家の活躍により情熱があふれ活気に満ちていました。だが、ザビエルには無縁。ザビエル城主の子として 1506 年に生まれ、厳しい家庭で育てられます。

ザビエルは、中世に起源を発する封建社会の出身でした。古風で格式の高い血筋です。貴族階級の人間として相応の教育を受けました。父親は宮廷の重鎮。姉は修道院に入り、兄たちは騎士という典型的な中世後期の一族でした。

フランシスコはナバラ有数の名家で、とても大切に育てられました。家柄にふさわしい教育を受け、騎士になることを期待されたはずです。しかし、スペインの統一で状況は一変。ナバラ王国とその従臣であるザビエル家は激動の時代を迎えます。ザビエル家は次々に苦難に見舞われました。彼が

9歳の時に父親が死去。一家の命運はスペイン王に委ねられました。悲劇はさらに続きます。父の死から1年も経たないうちに、スペイン兵の攻撃によりザビエル城は崩壊。彼の兄たちがスペイン王に反旗を翻したためです。兄たちは投獄されて以来、ザビエルは母と厳しい生活を強いられます。彼自身も良家の子でありながら汗水流して働きました。中世の後退とともにナバラも崩壊します。

旧習によると、当時、貴族の末子は聖職に就くのが伝統でした。フランシスコもその道を選択。勉強のためにふるさとを後にします。ザビエルは若くして聖職者の道を選びました。信仰心が強かったわけではありません。聖職は名誉な仕事で尊敬されると考えたからです。ザビエルは安定して暮らしを求め、聖職を与えられ、ナバラの地に戻るつもりでした。すべては一家が失った、富と名誉を取り戻すためでした。目指すは司教や大司教、最終的には枢機卿の座。聖職者は狩や釣りなど何でもできます。気が向いた時にだけ聖務を行えばいいのです。

1525年、19歳のザビエルはパリに向けて出発。大学では将来に備えて神学を修める予定でした。同時に国際色溢れるパリで刺激を受けます。ザビエルの時代には、ナバラの下級貴族などただの地方出身者です。大学に進んだおかげで、彼は世界の中心に近づけたのです。

都会で生活したことで洗練された雰囲気をも身につけたでしょう。

ふるさとに戻ればすっかり都会者です。いかにも紳士といった感じでうんちくを皆に語ったでしょう。パリは多くの著名人が集まる大都会でした。ラテン地区にはカルヴァンを始めエラスムスやダ・ヴィンチもいました。

16 世紀のパリ大学は西洋で最も権威のある大学でした。現代で例えるならばケンブリッジやオックスフォード、ハーバードを合わせたような大学です。彼の通った聖バルバラ学院にもヨーロッパ中から生徒が集まっていました。パリ大学は非常に形式ばった大学でした。サビエルの時代でさえ古風とされていたほどです。

サビエルはここで多くの書物を読まされました。しかし、模範的な生徒ではなかったようです。サビエルは遊び人でした。彼の友人たちも酒と女が大好きで連日お祭り騒ぎでした。身軽なザビエルは何度となく学院の壁を乗り越え、パリの街へ繰り出し、夜遊びをして門限を破りました。現代の学生と同様、金を浪費しては親族に泣きつく有様です。

拝啓

私の近況については、貴殿もお聴き及びと思います。学費が足りません。どうか私の苦境を察し、貴殿の寛大な心をもって私を貧困よりお救いください。 フランシスコより

何とか大学生活を続けた後は学位の取得までこぎつけます。ナバラに戻り聖職に就く時期が迫りました。ところが 24 歳になったザビエルの前に、風変わりな同居人が現れます。この 38 歳の元貴族の学生は、疫病患者に奉仕活動を行う命知らずな男でした。さらにその男は、サビエル城を攻撃したスペイン兵の一人だったのです。その名はイグナチオ。イグナチオ・デ・ロヨラも地方貴族の生まれでした。スペインの支配階級に属する家系でもあり、育ちがよく教養も備え、カスティーリヤ語に堪能でした。ダンスも踊れる上に剣術をたしなんでいました。

砲弾による負傷で除隊となった後、イグナチオは神に目覚めます。地位も財産も捨て施しを受けて生活し、道端で説教をしました。霊操と名付けた霊的な訓練を人々に広めたのです。

イグナチオがパリに来たのは、異端扱いされないように信用を得るためでした。ルターによる改革の衝撃は大きくカトリックは教会分離を懸念、イグナチオは教会に忠誠を示す必要がありました。しかし、人を引き込む彼の力は警戒心をあおりました。パリでイグナチオの周囲に集まった者は皆、彼の人間性に魅了されていました。イグナチオは多くの人望を獲得する偉大な才能を持っていたのです。

やがて優秀な学生3人がイグナチオの霊的な訓練を体験し、大学を中退し、慈善病院で働き始めるという事件が勃発。パリの人々は驚き、異端審問所に訴えて3人を復学させました。サビエルと同室のファールも霊的な訓練により彼に傾倒します。だが、ザビエルは違いました。高貴な生まれのザビエルはイグナチオを見下していました。血筋だけでなく、教養も劣っていると。最初は親しい間柄ではなかったのです。彼はイグナチオの仲間とも距離を置きました。スポーツや夜遊びの方がミサや清貧より魅力的だったのです。

しかし、事態は一変します。ザビエルの飲み友達がケンカで人を殺し、絞首刑に処せられたのです。さらに親しかった教授や友人が梅毒にかかり苦しみながら死にました。学資も底をついてしまいます。結局、イグナチオに援助を頼みました。金を工面してもらった後、ザビエルは試練の道を選びます。イグナチオが何を語ったかはわかりません。しかし、推測では自らの個人的な神の体験や励

ましを受けたことを話したと思います。

『ミサの前に読む聖人伝』 C・バリョヌエゴ著 中央出版社 1990年 P353 より

イグナチオは才能豊かなザビエルを、キリストに生涯をささげるように4年間も誘い続けました。

「人はたとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか」(マルコ8:36)

これがザビエルに対するイグナチオの説得の言葉の1つでした。

イグナチオは、抽象的な教えではなく個人的な体験を語ったのでしょう。ザビエルはイグナチオを信頼し霊操も体験しました。

霊操とはイグナチオの体験に基づくものです。

「キリストと生活する」1ヶ月に及ぶ黙想のプログラムです。イグナチオは失意の時期に個人的な神との体験から貧者に奉仕するようになりました。同じ体験を求める人々のために霊操を考案したのです。

伝統的な中世の信仰に、古代の修辞学を結びつけました。伝統的な記憶術は法廷で行われる証言や、政治演説などの場で使われます。イグナチオはこの記憶術を取り入れました。イエスの十字架や裁かれる自分の姿をリアルに感じるためです。イグナチオは霊操によって神の意志を直接知ることができると考えたのです。

これをプロテスタント的だととらえる人もいました。異端論争は逆にイグナチオの評価を高めま

す。退屈していた大学生にとって教室での講義よりずっと興味深かったでしょう。ザビエルも同じ感情を抱いたはずです。

ザビエルは常に退屈していました。やっと都会に出ても結局は行き詰まる。出口が必要でした。ザビエルはイグナチオと霊的な訓練のおかげで退屈なナバラへの帰郷を思いとどまりました。イグナチオはザビエルの恩人となったのです。

ザビエルを理解する上で重要なことはイグナチオに対する友情が生涯変わらなかったことです。

「いつか彼に恩返しできるだろうか？ 彼が助けてくれたおかげでまやかしや異端から解放された。何と偉大なる神のしもべよ。」

イグナチオとその同志たちは小さな宣教会を結成しました。清貧と貞潔を守ることを誓い、エルサレム巡礼を行い、聖地を支配するイスラム教徒を回心させたいと願ったのです。

こうして 1537 年、物乞いの姿をした一段がパレスチナを目指しました。この時が大きな転機でした。スペインの地方貴族だったフランシスコ・ザビエル、彼は聖人への道を歩み始め、極東への宣教で後世に名を残すのです。

3. 私の召し出しまでの心の動き

入会の決意：不安（手放す不安）と光（神様のために全てを捨てる）

将来のビジョン：確実さ（キャリアと肩書き）と虚しさ（このまま続けて何が残るか？）

イエズス会入会前のノートから

・「住宅営業に注ぐ、相当なエネルギーを別のものに振り向けた方がいい人生を送れるんじゃないか？」と考え始めたのが召し出しのきっかけ。

・休日に、身障者の方の入浴介助のボランティアをしていました。営業とは違う、無償の奉仕の体験も召し出しの準備になりました。

・今の働き方では、家族がもてても理想に遠い。「結婚してください」と強気では言えない。それならむしろ、別の道を探した方がいい。何かで困っている人の手伝いに回った方がいい。

このような背景があって召し出しに繋がります→ノートは霊操体験後の内容

・本当の幸せは誰かに身を委ねること。捧げ尽くすこと。

・「失うものはたくさんあっても、損することは1つありません」の助言。

・人生に期待しなくなる罪。家族の反対などもありましたが、修道生活を諦めると大きな希望を失

うことになる。それに代わるものを見つける自信がない。

・足りないところ（35 歳になって哲学・神学を 6 年は勉強するなど）が多いが、真面目に取り組めが、そこに神様の恵みが注がれてくると言う期待。

・全てがこれから。足りないところがあっても、将来への恐れがなくなって癒された。

・司祭を志すのは世間体ではなく、何か一つを人生で成し遂げたいから。その可能性があるのなら、挑戦したい。

・「1 年、先送りにしたら」という意見もあった。でも、今の仕事（住宅営業）は生半可ではできない。転職しても、人生が萎えてしまいそうに感じた。

・「会社員の生活の限界が見えて修道生活に頼ろうとしているのではないか？」と言う疑いももたげた。

・修道生活に持っていく一番大切なものは「神に向かう真っ直ぐな心」

・「神様のご意志は、自分にも他人にも手心を加えてはならない。親や家族の心情を叶えることが結果的に幸せにならないことがある。」の助言。

・「親の願いがそのまま子供の幸せと一致する人もいる。そうでない場合の心の葛藤は互いの十字架になる。」の助言。

・「召し出しは本人だけではとどまらない。愛情をベースにした不安、やりきれなさからくる家族からの反対もあります。気持ちに変化もあるし、深く考えるようになります。そういったことを、神様に捧げて神様への信頼を深めることが大切。」の助言。

人生の流れを見て、タイミングをはかって神様は人を呼ばれる

振り返りの質問

Q.“ガリラヤの春”だけでなく“ガリラヤの危機”があっても、イエス様に従っていけるでしょうか？

Q.受難予告をされるイエス様の孤独を想像してみましょう。何を感じますか？

Q.ザビエルも初めからイエスに従おうと思っていたわけではありません。初めから聖人君子の人が誰もいません。紆余曲折を神様は用いられます。イグナチオから霊操を授けられて神に心が向かいました。これまでの霊操であなたの中に変化が生まれましたか？

Q.神様に呼び掛けられたと感じことがありますか？ それが今、どのような結果に結びついているのでしょうか？

結びの祈り 聖フランシスコ・サビエルに取り次ぎを求める9日間の祈り

いつくしみ深い神である父よ、あなたは、聖フランシスコ・サビエルの心に、愛の炎と、人々の救いへの情熱を燃え上がらせてくださいました。

聖フランシスコ・サビエルは、いかなる危険や試練にもくじけず、多くの苦労や旅を通して諸民族に福音を宣べ伝えられました。

彼の心を燃え上がらせた情熱を私たちの心にも沸き立たせ、日本の教会が彼の宣教精神の遺産を受け継ぐことができますように。

私たちの主イエス・キリストのみ名によって、アーメン

参考資料

『イエスの生涯を黙想する』英 隆一郎神父 キリスト教放送局 日本 FEBC 第 16 話 「メシアとしての覚悟」 2007 年 10 月～2008 年 3 月放送

『フランシスコ ザビエル』 発売元 ライフ・エンターテイメント 2009 年 本編 58 分

『ミサの前に読む聖人伝』 C・バリョヌエボ著 中央出版社 1990 年